

とくろざわの暮らし今昔

繭の糸取りと絹織り

現在、私たちが身につける衣服は、そのほとんどが既製品の洋服です。和服姿は、成人式や結婚式といった特別な日に目にする程度となりました。しかし、「ちょっと昔」に目をやると、昭和30年代までは日常に和服を着る人も多く、着物に刺繍着姿で食事の支度をなさるお母さんや、着物に兵児帯を締めてくつろぐお父さんの姿を思い出す方も多いことでしょう。

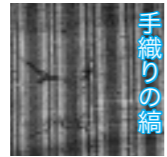
さらに、昭和10年代までは布地も手作りされることが多く、女性たちは農作業や家事の合間をみればハタシと呼ばれる織り機に糸を掛け、綿布や絹布を織ったものです。

家で織られる綿布には縞や紺無地があり、これらで野良着やふだん着を仕立てました。絹布は、繭から取った糸で白生地を織り、これを紺屋と呼ばれる染物職人に頼んで柄物や無地に染め、よそよきの着物に仕立てました。また、糸を数種類の色に染め分け、順番に並べて縞を織ることも多くありました。

絹織りに用いられる繭は、薄皮繭・ピジョン繭（繭を作る途中で蚕が死に、しみがついた繭）・玉繭（蚕が2頭で作った大粒の繭）といった肩繭で、これらは値段が安いことから主として自家用とされました。

糸を取るには、まず、鍋を七輪にかけて湯を沸かし、この中で繭を煮ます。そして、繭が浮き上がってきたらミゴ（稲の穂のしん）の小蒂や竹箸でつついて糸口を出し、5、6粒から10粒くらいを1本にまとめて座織りの枠に巻き取っていきます。

太さのそろった平らな糸を取るには技術が必要であり、昭和初期ごろには各地で糸取り講習会も開かれました。久米では昭和7年ごろ、埼玉県から招いた指導者のもとの30~40人の女性たちが糸取りの技術を学んだそうです。（宮本）



「もみぢは、全国で愛用された野良着。たもおおしやれて、所沢の田並みにも昔々入る人います。」
 所沢市立間川小学校前、東川



「どんな生きものがいるのかな？ みんなで、川に入ってドジョウやコイ、ヨシノボリなどを網で捕まえた「東川・川まつり」。
 7月24日/東中学校前の東川

街の写真館



▲所沢のちびっこアスリートたちも、挑戦した「ダイアプラン KIDSトライアスロン大会」。(撮影/市民カメラマン・松崎 満)
 7月17日/狭山市立立間川小学校

みんなのなごみ広場

防災チェック



～避難勧告・指示ってなに！～

市では、台風や集中豪雨などにより、災害の恐れがあるときには、次の内容で避難するようお知らせします。

- 自主避難
市からのお知らせはしませんが、天気予報や台風情報などから危険を感じたときに、親せきの家などの安全な場所へ自主的に避難することです。
- 避難準備
災害が起きることが予想されるとき、高齢者や障害者など避難をするのに時間がかかる



皆さんに、避難の準備や避難を始めるようお知らせします。

- 避難勧告
災害が起きる確率が高くなってきたとき、避難するようお知らせします。
- 避難指示
災害が起きる確率がかなり高くなってきたとき、早く避難するようお知らせします。

◎具体的なお知らせは、広報車、防災行政無線、自治会、自主防災会などを通じて行うことになっています。
 問い合わせ 危機管理課(☎2998-9399・FAX2998-9042)

はっぴーとこ 野老 子

～お年よりの顔に笑顔が戻るときが最高～

西村 澄子さん（東狭山ヶ丘在住）



下の写真は、市内にある特別養護老人ホームの風景です。屋敷を済ませ、入所しているお年寄りがホールに集まっています。そこでは、哀愁のある津軽三味線の音色と民謡が競うように響き、穏やかな時が流れています。

青森県に生まれた西村さんは、お母さんの背中で『津軽じょんがら節』を子守り歌に育ちました。当時は、替女さんと呼ばれる三味線を携え農村・山村を巡る盲目の女性芸人がたくさんいて、子どものころから、三味線や民謡に親しむ機会に恵まれていました。「とにかく歌うことが大好きでした」と子どものころを振り返ります。

高校を卒業後上京。病院で看護師として働くかたわら民謡の勉強も続けていました。一時はプロへの道も考えていたとか。所沢へは20年ほど前に移り住み、ご主人とラーメン屋を開店します。お店でも三味線と歌を披露している。



三味線と歌の演奏は聴き入るお年寄り

「お客さんの中にも私のファンがたくさんいるんですよ」と西村さん。サービス精神いっぱいのラーメン屋さんです。西村さんは師匠について三味線を習ったわけではありませんが、3年ほど前に津軽三味線の全国大会に出場するために、一生懸命練習をしました。この甲斐あって眼を閉じていても童謡から歌謡曲までさまざまな音が出せるようになったそうです。

今では、月に数回老人ホームなどで三味線と歌を披露するボランティアをしています。「私は、一人ひとりのお年寄りの耳元で、三味線を弾きながら民謡や童謡などを歌います」とうれしそうに話してくれました。認知症などの影響で無表情だった顔に笑顔が戻り、家族の顔も思い出せなくなってしまったお年寄りが、リズムをとって踊り出すこともあるそうです。

いきいきとしたその姿を見ると、また会いに来ようと思うそうです。「三味線と歌の音楽療法は、人を元気にしてくれます。興味のある方が集まって、1人より2人、2人より3人とボランティアの輪が広がっていけば」とその思いを語ります。

最後のプレゼント
 南住吉・宮下 広子
 大切にしているオルゴールがあります。23歳の夏、父からもらった誕生日のプレゼント。翌年父は亡くなり、私にとっては最後のプレゼントになりました。オルゴールの売り場に父を連れて行き、「子どもっぽいと思われないかな」と心配しながら、「これがいい」という私に父は笑みながら、「いいよ」と買って買ってくれたものです。その笑顔は、おまえの好きなものはわかってるよ、そんな感じでした。真ん中にビエロが逆立ちしていて、その周りを木馬がゆっくり回ります。5月の朝、「行ってくるよ」と旅行

誰でモイ
 ツモイ
 セモイ
 イモイ
 テーマ
 プレゼント



とくとくとこ 町内会めぐり

【吾妻地区・荒幡町内会】

～地域の力の結集を目指して～

荒幡町内会は、東村山市に隣接した吾妻地区の西に位置し、近くに荒幡の富士や市民の森があります。現在、松が丘の一部を含めて2,500世帯余りで構成されています。

荒幡の富士は、明治17年から15年間の歳月をかけ、当時百戸余りの住民が手作りで築きあげた高さ16.3m（標高119m）の小富士山で、私たちの誇りであり、協力・連携のシンボルです。冬の晴れた日の眺望はすばらしいものです。

主な行事としては、夏祭り、敬老会、運動会、七歳の祝いがあります。夏祭り1日目は、荒幡小学校の校庭で盆踊りと花火を楽しみ、スポーツ団体、PTA等の皆さんによる夜店も好評です。2日目の御輿道中は、地元の方から寄付された御輿2台、子ども会育成会の皆さんによる手作り子ども御輿2台と山車で町内を練り歩きます。敬老会では、多くの方が会の主賓の立場にもある、長生クラブ・荒幡レクリエーションクラブの皆さんが踊りを楽しみ、地元のさまざまなサークルの皆さんにもボランティアで出演していただいています。また、幼稚園児の演技や子どものお囃子も好評です。

運動会では、野菜を賞品にした買物競争が大人気です。

このほか、防犯、防災、環境美化について、各団体と連携を強めるため、学校・地域連絡協議会を立ち上げて活動を始めました。

これからも隣近所が助け合って暮らしやすい町づくりを目指していきます。



荒幡の富士

本心が欲しいもの
 東所沢・勅使河原 亜矢
 私が子どものころは、欲しいものがあったらすぐに買ってもらうことが多かった。両親にいくらねだっても「誕生日に」または「クリスマスに」と言われてこまかされた。そのせいか、年に2回のプレゼントは「本当に欲しいものだったのか？」と日付けが近づくと考え直したりもした。そのせいか、もらったプレゼントはうれしくて大切にしていた。昔と比べ、欲しいものをすぐ手に入れられる子どもたち。プレゼントが続くせいか大切にできなくなりつつあることに、同感してしまう。

母のプレゼント
 東町・山本 典子
 プレゼントはいいですね。差し上げる方もいたく方も心がウキウキします。たとえ高価なものでもなくて、心のこもったプレゼントはいいですね。私は母からのプレゼントが一番の思い出です。終戦後、食へたくにも苦しいとき、父母が土地を開拓していました。芝の植え込みの中で、私の誕生日に、クローバーの白い花を集めて、首かざりをつくってくれたことを思い出します。そして、やっと見つけた四つ葉のクローバー！「これを見つけたら幸せになるんだよ」と言ってくれた母の温もりを覚えています。

今回のテーマは「緊張するとき」です
 ▶「誰でもエッセイ」ではテーマにそった投稿を募集 ▶はがきに300字以内 ▶文章は添削あり ▶掲載者には記念品を進呈 ▶次回のテーマは「緊張するとき」 ▶締め切りは9月7日(必着) ▶住所・氏名・年齢・電話番号を明記 ▶送先：〒359-8501・並木1-1-1 所沢市役所秘書広報課「みんなの広場」係 ◎Eメール(アドレスa9024@city.tokorozawa.saitama.jp)も可。